

水球今昔

加藤 正躬(S29 大卒)

私が水球をやっていたのは、昭和 23 年頃から 28 年迄だから、今からはほぼ 60 年前ということになる。卒業して 1 年間は、水泳部の監督をしていたが、その後は、仕事に追われ、水泳、水球とはすっかりご縁のない時期が続いてしまった。

しかし、平成 3 年頃、水桜会の会長を引き受けることになって、久しぶりに水球の試合に顔を出すこととなり、その後、渡辺正直会長の時代迄、かなりの数の試合を見てきた。改めて考えてみると、昔の水球と今の水球は、かなり多くの点で変化（進歩？）してきている。

残念ながら、ここ数年は、試合を見ていないので、最新の水球の知識はないが、知っている範囲で、思いつくまま昔と今を比べてみよう。

まず、今と昔では、ルールからしてかなり違っている。例えば、

試合時間……今は、8 分クォーター制だが、我々の時代は、確か 30 分ハーフだったと思う。ただし、時間の計り方は今のように厳密ではなく、かなりいい加減であったことは間違いない。トータルで 1 時間は超えていたように思う。

センターボール……今は、クォーターの始めだけ審判がボールを投げ、両側から取りに行くが、昔は、得点が入る度、全員ゴールラインに戻ってこれをやっていた。ボールを投げ入れる場所も、今はプールの端だが、昔はプールの真ん中、文字通りセンターボールだった。審判が投げ損うと、あるはずの所にボールがなかったりしたので、改善されたのだろう。

反則……我々の時代に、そもそも正式のルールブックがあったのかどうか、少なくとも私は見ていない。したがって何が反則なのか、反則の定義をせよと云われると、少なからず困惑する。我々が教わったのは、ボールを持っている相手には（殴る以外は）何をしてもしよいが、ボールを持っていない相手に、タックルすれば反則というだけだ。今のように、相手の身体の上を泳いでは行けないとか、プッシングというような言葉は、この時代聞いたことがない。かなり激しいタックルをしても、ちょっとやそっとのことでは笛は吹かれなかった。それだけにラフプレイも多く、これが国際的にも問題となり、だんだんルールが厳しくなったと云うような話を聞いた記憶がある。ラフプレイが少なくなるのはもちろん良いことだが、反面、今の水球はあまりに笛が多く、そのためプレイが度々中断し、試合の流れが止まる。見ている方からすれば、昔の方が面白かったのではないか。なお審判も、昔は一人だけ、だから審判の見えていないところでの反則はかなり激しかった。現在は、レフリー 2 名、ゴールジャッジ 2 名と云う体制のようだが、ここに至る過程はどうだったのだろうか。知っている人がいれば教えて欲しい。

この外、退水は、今では一定の時間が経てば戻れるが、昔は、どちらかが点を取らなければ戻れなかったとか、30 秒ルールがなかったとか、フリースローではゴールからの距離に関係なく、ゴールは狙えなかったとか、反則については随分と違ってきている。

まだまだ違いは沢山あるが、何と云っても最大の違いは、メンバーの交替だろう。我々の頃は、原則としてメンバーの交替は認められなかった。つまりスターティングメンバーとして出た以上、最後までやらなければならなかった。歴史的に、ヨーロッパ系のスポーツ（例えばラグビー）は、原則的に交替が認められず、アメリカ系のスポーツ（例えば野球）は、交替自由というような傾向があったように思うが、特に、運動量の多いラグビーとか水球では、やはり体力の維持、怪我の防止などから合理的な思考に変わってこざるを得なかったのだろう。

そしてこれが、その後の水球のゲーム運びの変化に、決定的な影響を与えたように私には思える。

60 年前のゲームスタイルは、原則として「マンツーマン」と呼ばれるものだった。フォ

ワード3人、バックス3人で、それぞれが相手をマークする。攻撃は原則としてフォワードの仕事で、せいぜい中盤のバックスが、状況により参加する程度。センターフォワード（フローター）は、相手ボールになっても自軍に戻ることは先ずなかった。したがって、フルバック（フローターバック）が、攻撃に参加することも殆どなかったわけだ。キーパーがボールを止めると、中盤のバックスまたはフォワードが、横に（或は縦に）動いてボールを繋ぐ。ボールが敵陣に入れば、後はフォワードの仕事、といった感じだった。メンバー交替なし、30分ハーフ、タイムアウトもなしと云うルールでは、現在のような全員攻撃、全員防御といったスタイルは、無理だったわけだ。

もっとも、この時代に全員攻撃、全員防御の考え方が全くなかったわけではない。私が大学3年生の頃からだったと思うが、「オールメンアタック・オールメンディフェンス」という言葉が、やはりはじめた。当時、バスケットで、マンツーマンからゾーンディフェンスへという動きがあった。水球は、ゲームの類似性から、バスケットの影響を受けることが多かったように思う（私自身も冬は時々バスケット部の練習に参加させてもらっていた）。バスケットのフォーメーションを研究していると、自然に全員攻撃の考え方に到達する。

いくつかの大学で、「泳ぐ水球」＝全員攻撃が研究され始め、当然のことながらこれにゾーンディフェンスが加わって、新しい流れが出始めていた。しかしかなりの体力、泳力を要するというのもあって、この方式を（部分的にはともかく）全面的に導入するには、かなりの決断を要した訳だ。

今、振り返ってみると、どうやらこの決断を、最初に下したのは学習院ではなかったかと思う。

昭和28年の全日本で、学習院は早稲田と当たった。当時、早稲田は関東学生1部で、早大、慶大、日大のビッグスリーと言われており、その他の大学には負けたことはなく、春のリーグ戦でも、学習院は早稲田に完敗していた。この試合で始めて我々は、全員攻撃、全員防御の体制をとった。ゲームスタイルが違った場合、主導権は全員攻撃側にある。全員が動いたら、相手もこれに付き合わざるを得ない。

この試合では、作戦功を奏し、前半0-0、後半0-0、延長に入って前後半0-0、再延長も0-0で推移したが、後半残り数秒で、1点入れられてしまった。

早稲田はこの試合に勝ったあと、関西の大学に大勝し、準決勝に進出した。もしあの数秒をもちこたえていたら、この試合は、反則数で学習院が勝っていたはずだ。とすれば学習院が、全日本の準決勝に進出するチャンスだったわけだ、と今でも悔しい思いがする。この試合に出た連中は、恐らく死ぬ迄、この試合のことは忘れないだろう。

それはともかくとして、この試合の前に、現代スタイルの全員攻撃、全員防御を全面的に取った例は、私の知る限りではない。もちろん日本中の試合を見ている訳ではないので断言はできないが、もしそうだとすれば、学習院も記録に残らない歴史の一旦を担ったことになる。この試合の翌日、全日本のメンバーだった慶応のOBから、「学習院は、随分思い切ったことをやったね。それにしても惜しかったね。」と云われたのが記憶に残っている。

この試合を最後にして、私の水球生活は事実上終わり、翌年（昭和29年）卒業して大学水泳部の監督に就任するが、この年一体どのようなゲームスタイルをとったのかは、何故か全く記憶がない。多分マンツーマンに戻っていたのだと思う。

サラリーマン一年生では十分練習も見られず、1年で監督を辞退した。

その後、60年を経る間に、交替制が導入され、今の水球スタイルが確立された。それにしても、一旦交替したら二度は出られないというルールが多い中で、13人がいつでも出入り自由と云うのは、やはりバスケットの影響だろうか？

以上

(2011/9/4)